

齊藤茂吉全集

第十卷

齊藤茂吉全集

第十卷

第四回配本（全三十六卷）

齋藤茂吉全集 第十卷

定價 千八百圓

昭和四十八年四月十三日發行

著者 齋藤茂吉

發行者 岩波雄二郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩波書店

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

作歌實語鈔

一	一定跡……………	三
二	一定跡 つづき……………	六
三	一定跡 つづき……………	九
四	一定跡 つづき……………	一二
五	一定跡 つづき……………	一五
六	實語……………	一九
七	千陰・春海等……………	二三
八	他作批評の態度……………	二六
九	藏眞……………	三五
十	篠原志都兒……………	四一
十一	湯本禿山……………	四六

十二	海上胤平		四
十三	海上胤平	つづき	五
十四	滑稽歌		五
十五	自己發展		六
十六	師法拘牽のこと		六
十七	師法拘牽のこと	つづき	七
十八	師法拘牽のこと	つづき	七
十九	師法進展		七
二十	師法進展	つづき	八
二十一	師法進展	つづき	八
二十二	師法進展	つづき	七
二十三	師法進展	つづき	八
二十四	歌論		三
二十五	歌論	つづき	五
二十六	歌論	つづき	六
二十七	萬葉調		一〇二

二十八	萬葉調 つづき	一〇四
二十九	實朝の萬葉調	一〇七
三十	眞淵の萬葉調	一〇九
三十一	宗武の萬葉調	一一二
三十二	魚彦の萬葉調	一一五
三十三	良寛の萬葉調	一二七
三十四	元義の萬葉調	一二〇
三十五	雅澄・曙覽の萬葉調	一二三
三十六	子規・左千夫の萬葉調其他	一二六
三十七	雜報的歌・散文的歌	一二九
三十八	雜報的歌 つづき	一三三
三十九	もののはじめ	一三五
四十	實に處る	一三七
四十一	古調派に對する批難	一三八
四十二	三家一首	一四〇
四十三	リアリズム	一四三

四十四	沈鬱		一四
四十五	沈鬱 つづき		一四
四十六	寂寞		一四
四十七	雄渾高古其他		一五
四十八	宜長の歌論		一五
四十九	宜長の歌論 つづき		一五
五十	歌學者と歌人		一五
五十一	安易・低調		一五
五十二	安易・低調 つづき		一五
五十三	歌書く		一六
五十四	多作・寡作		一六
五十五	早口・遅口		一六
五十六	歌人		一六
五十七	自由		一六
五十八	大自在		一六
後記			一六

短歌初學門

短歌の形態 其の一	七三
短歌の形態 其の二	七六
寫生 其の一	八五
寫生 其の二	八九
寫生 其の三	九六
寫生 其の四	一〇六
寫生	一〇九
現實此岸	一一一
眞實	一二〇
觀入	一二三
相待的觀入	一三〇
短歌の言語 其の一	一三三
短歌の言語 其の二	一三六
短歌の言語 其の三	一三七

短歌の言語	其の四	二四〇
短歌の言語	其の五	二四三
短歌の言語	其の六	二四五
聲調	其の一	二四九
聲調	其の二	二五六
萬葉調		二六〇
形態		二六二
體位		二六五
小文學	其の一	二六八
小文學	其の二	二七四
衝迫		二七八
處女性		二八六
思無邪		二九〇
單純化		二九六
平生切磋		三〇五
犠牲		三〇九

苦心・推敵	三二
辛抱	三七
素人と玄人	三三
歌評	三七
永遠性	三一
永遠・無限	三六
空想	三九
空想、浪漫主義	四三
古代	四八
正師 其の一	五〇
正師 其の二	五八
友・結社・門人	六三
見込・豫定	六六
競争者	七〇
寸言	七三
後記	七六

作歌四十年

自序	三七九
赤光抄	三八一
あらたま抄	四二二
つゆじも抄	四四九
遠遊抄	四七六
遍歴抄	五〇〇
としび抄	五二〇
たかはら抄	五六三
連山抄	五九四
石泉抄	六〇九
白桃抄	六四九
暁紅抄	七二〇

寒雲抄	七四八
のぼり路抄	七八五
いきほひ抄	八〇三
とどろき抄	八一八
くろがね抄	八四三
昭和十九年抄	八五五
後記	八六一
後記	八六三

作歌實語鈔

一定跡

正岡子規（竹の里人）先生が亡くなられてから、歌の方の門人のかたがたも、いつのまにか少しづつ氣乗がしなくなつて、歌會をしてもなかなか集まらない。集まつても、雑談などに時を過ぎて、作歌を勉強しようとしなない。従つて歌會を開く度數も少くなるといふ具合であつた。

そのとき一番やきもきしたのは伊藤左千夫先生で、ある時などは自身で歌友の戸別運動までして説きまはつたさうで、このことは亡くなられた木村芳雨さんの追憶談によく話されてゐる。

ある時は、皆の集まりの悪いのは場處が悪いためだらうといふので、皆のために集まり易い場處の、上野公園東照宮前の休息所を選んだことがあつたさうである。さうして、同人の集まりが少しでも多いと、左千夫先生は非常に喜ばれたもので、そのときのことを芳雨さんが追憶して、『さういふ時には伊藤君が非常な満足で、お萩をお重に詰めて來たり、又は五目を持つて來たり、随分勉めたものでした。併し夫れでも長續きがせず、追々來る人が少なくなつて、又々中絶するやうになりました』といつて居られる。

左千夫先生のかういふ行爲は、御本人が結局歌が好きで罷められないといふこともあらうし、

根岸短歌會興隆のため、亡師に對する報恩のためといふやうなこともあらうし、負けぎらひな、議論好きな先生であつたから、對他的な心持も皆無ではなかつたらうとおもはれるし、いろいろであらうけれども、この實語鈔で話さうといふ、作歌實行上の點でいふと、かういふ歌會の集まりといふものは、知らず識らず、作歌活動の、『潛勢力』をつくるものである。この潛勢力の養成は、『寫生道』實行のうへに缺くべからざることであつて、この潛勢力の蓄積が無くなつたら、どんな有名な歌人でも、どんな老大家でも、駄目になるものである。

この潛勢力の養成方法は、千差萬別であるが、歌會を開いてそれに出席するといふこともやはり大切な一つの方法であつて、歌會席上吟は多くの場合題咏であるから、そんなことをするより一人散歩でもして實地の歌を作る方が好いとおもつたり、歌會の席上でぼろ糞のやうに自作を評せられたりするよりも、一人しづかに自作を反省し、自作を樂しむ方が好いとおもつたりするのは、君子の考のやうで一應はうなづけることであるが、實際からいふと、時間をつぶしてつまらぬとおもはれるやうな歌會に出席し、無理にも題咏の歌をつくり、自作への惡評に耐忍してゐたりしてゐるうちに、いつ蓄積せられるとも知れずに、潛勢力が蓄積せられてゆくものである。

私の先輩の石原純（阿都志）博士が、大學を出て、理論物理學の新しい方面の研鑽に専念せられた時分だから、特に作歌のために自宅なり研究室なりで多くの時間を割くことが出来ない。そ

こで、歌會に出席して、その時間だけを利用してぎりぎりの作歌に勵まれてゐた。博士が間もなく歐羅巴に留學して、あれだけ澤山の特色ある歌を作られたのは、つまりは一月に一回か二月に一回ある歌會といふものを利用せられた結果であつただらうと自分は解してゐた。この結論は只今でも毫もかはらぬ。

外國の事柄、外國の風物に接して、いかに驚き、いかに讚歎し、いかに感動したところで、直ぐ歌になるとは限らぬものである。やはりそれに順應し、ついで新しく創造し、生産すべき力量、即ち寫生の實行力を潛勢として保有してゐなければ、到底その寫生の實行が出来るものではない。左千夫先生の歌會獎勵は、ああいふ風に、必ずしも修身談、作歌入門談として、説いてまはつたのでなしに、歌會を開くこと、歌會で作歌すること、歌會で議論すること、そのことをまめに實行せられたのであつた。それを理論化し、概念化するほどの必要をも意識せられなかつたやうに見える。

私とてもまたさうである。けれども、アララギ會員諸氏が、歌會を開かれることについて、益々有益に發展し得る見込だけは、充分に明瞭に云ひきる自信があるので、實語鈔の第一にそれに言及することとした。歌會の一々の形式については、銘々の工夫によつてかまはぬだらう。(昭和一七・一・一〇)